

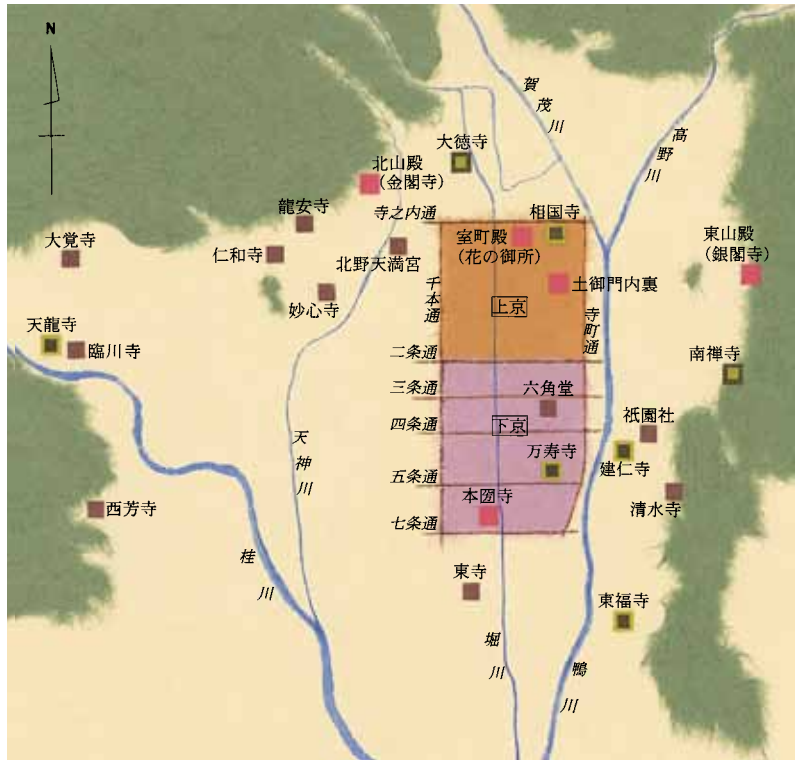
室町時代

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

南北朝の内乱に始まり、織田信長の入京までのおよそ200年間の室町時代は、北山・東山文化が花開き、町衆が力をつけるなど華やいた時代です。しかし、戦乱の多い激動の時代でもあります。ここでは、室町時代の京都とその周辺の様子をみてみたいと思います。

将軍の邸宅 室町時代は、京都に幕府が置かれた唯一の時代であり、京内の武士の人口は急激に増加します。武士は、将軍の御所が主に置かれた上京を中心^{つちみかどだいり}に集住し、天皇の内裏も、土御門内裏に定まった事から貴族も上京に集まるようになり、上京は武士や貴族の多く住む町となります。

室町殿（花の御所）は、三代将軍足利義満によって築かれ、以降、累代の将軍邸となります（写真1）。北山殿（金閣寺）、東山殿（銀閣寺）は、造営当初とは大きく姿を変えています、将軍の邸宅の



室町時代の京都

かたちを現在まで伝えるものです。それぞれの調査では、創建当初の建物、堀、庭園などが検出されています。

1993年に行なわれた東山殿の調査では、礎石建物、園池、石垣

をとまなう排水溝、他に例を見ない花崗岩製の導水管などが発見されました。義政の趣味を凝らした東山殿の当時の姿が確認され、^{おうにん}応仁の乱後も将軍の権力を誇示していました。

略年表

鎌倉時代	室町時代												桃山時代										
1333	1336	1339	1342	1358	1377	1392	1397	1403	1467~1477	1482	1485	1499	1536	1543	1568								
鎌倉幕府が滅亡する	足利尊氏が京都に幕府を開く	後醍醐天皇没する	天龍寺建立	五山の制を定める	足利尊氏没する	太平記	室町殿造営	南北朝の統一	相国寺建立	北山殿造営	相国寺の七重塔が焼失する	応仁の乱	東山殿造営	山城国に一揆がおこる	龍安寺の庭園が作庭される	山城国に一揆がおこる	東山殿造営	山城国に一揆がおこる	龍安寺の庭園が作庭される	天文法華の乱	種子島に鉄砲が伝来する	洛中洛外図	織田信長が入京する



北山殿



本圀寺出土
明染付碗

繁栄する洛中、賑わう洛外 京の町は、南北朝の内乱が終息に向かう14世紀の後半から活気を取り戻し始め、15世紀の前半にはその頂点を迎えます。洛中は、二条通を境にして上京と下京に分かれ、西は千本通より、東は寺町通まで、北は寺之内通より、南は七条通までが人家で埋まる都市となっていました。

1991年に調査された中京区東洞院三条の町衆の屋敷跡とみられる遺跡からは、石敷きの池や滝組をともなう庭園遺構が検出されました。池は、東西11m、南北9.5m以上で、庭石には遠く和歌山から運ばれてきたものもあります。ここから出土した遺物には、中国金代(1115～1234)に作られた楼阁山水文を描いた白磁の陶枕や南宋の龍泉窯で焼かれた青磁の鉢などが出土し、当時経済力をつけていった町衆の暮らしぶりがうかがえます。

また洛外には、天龍寺、北野天満宮、祇園社、清水寺などの門前町が栄えていました。

1992年に天龍寺境内の南側で行なわれた門前町の調査では、堀

で囲まれた空間に掘立柱建物や土蔵の基礎と考えられる遺構が検出され、洛外での人々の暮らしが確認されています。当時の京都とは、これら洛外の町と洛中を合わせた地域なのです。

洛外と洛中の寺院 室町幕府は五山の制(相国・天龍・建仁・東福・万寿の五寺)を設け、臨済宗を手厚く保護しました。これらの寺院は洛中を取り巻くように洛外に造営され、壮大な伽藍を誇りました。一方、幕府の庇護を受けない宗派である浄土宗や日蓮宗は、下京を中心に寺院を建設し、町衆への普及活動の拠点を築いていきます。

日蓮宗の本願寺跡の調査では、幅3～6m、深さ1～3mの断面がV字形の堀が確認されています(写真2)。山科本願寺跡では、現在も幅10m、高さ3～10mに達する土塁や堀が残されています。また、相国寺や天龍寺などの五山の寺院の調査でも堀や土塁の遺構をみることができます。これらは、応仁の乱や天文法華の乱などの戦乱に備えて作られたのです。

防御する町 応仁元年(1467)

から10年におよぶ応仁の乱によって、京都の町は焦土と化しますが、そこから復興していく姿は洛中洛外図にみるることができます。応仁の乱後の洛中は、たび重なる戦乱によって規模は縮小します。上京と下京は完全に分離し、二つの町は室町小路でつながるといった状況になります。町の周囲は、町衆などによって、構という堀や土塁、柵などの構築物で囲われ、防御されるようになります。

1992年に下京区高倉通仏光寺で行なわれた発掘調査では、下京の構に関連すると考えられる巨大な堀がみつかっています。この堀は幅6.5m、深さ2.0mあり、南北50m以上にわたって検出されました。また、町の内部でも大小の堀や溝が確認されており、町組や屋敷をめぐっていたようです。これらの中には、排水路として機能したものもあり、町衆みずからが町を管理、運営した事を表わすものです。

室町時代の後半、京都はこのような姿をとって、戦乱から町を守りながら、やがて織田信長の入京を迎えるのです。(南 孝雄)



写真1 室町殿の庭園遺構(北東から)



写真2 本願寺跡の調査(北から)